

## SY4-2

## 家族支援専門看護師の役割とその教育

山口 桂子

日本福祉大学看護学部 看護学科

小児看護における目標は、あらゆる健康レベルにある子どもたちが、心身ともにその子らしく成長発達していくことであるが、その対象を子どものみならず「子どもとその家族」ととらえることは、従来から一般的なことであった。しかし、その表現の根底には、「子どもにとっての良い母親」、「子どもの医療的ケアを任せられる良い家族」というように、子どもを中心として、家族を子どもの成長発達を支えるサポーターと位置づけて役割期待する小児看護者の思いが根強くある。小児領域における家族支援専門看護師の役割は、その援助対象について、子どもを含めた家族全体として改めてとらえなおし、その家族自身がどのような家族でありたいのかを家族と一緒に探り一緒に歩んでいくことにある。

そこで、家族支援専門看護師を育成する上での目標は、昨今の社会的価値観の多様化がもたらした様々な家族の形を、まずは“認める”ことができるように導くことである。中でも、家族支援専門看護師の学修においては、家族を捉える力、いわゆる“家族アセスメント能力”の獲得が最も重要な家族看護の基盤となるが、特に、養育期・教育期にある家族を主な対象とする小児領域では、“家族発達”の考え方を中心に、その家族の発達課題を確認しつつ、アセスメント・介入していくことは、最も基本的で有用なことと考える。また、家族の中に健康問題を持つ子どもがいる場合には、往々にして、その子どもの健康問題への援助が最優先され、そのほかの家族メンバーはその制約の中での生活を余儀なくされる事例が多いが、家族全体のバランスをどのように取りながら生活していくことが、この家族の望む形なのかを探り、有効な支援につながる具体的な方略を、実習などを通して学修できるように、環境を整えることが大切である。そのためには、実習を受け入れてくれる臨床現場の家族看護への理解は非常に重要な点である。

一方、家族支援専門看護師を育成する教育課程自体は、あらゆる家族問題に対応できることを想定したものであり、必ずしも小児領域に特化したプログラムになっているわけではない。そのため、実習で小児期家族をほとんど経験できていない専門看護師もいる。教育課程の現状と家族支援専門看護師個々の背景などを加味しながら、小児領域で活躍できる人材を増やすための継続的な学習機会の保障なども今後の課題である。